

松平福次序
戸田大炊頭

右之面之領紙

濟朱平政三郎下之島村相改書付下紙

差紙

一右之外之茂村相改書

濟朱平政三郎下之面之者之出之入別書之

下紙相付紙

十月

濟上洛
濟社参
等之紙

寛永十周年三月

- 一 次飛脚の儀付而江戸大坂迄宿る者凡は
八本より儀不事
- 一 つ子の宿次系相八人共法いそぎの里相拾ひ人
事
- 一 津通の時立く而くくせ馬每人是法授け方
ふいりやう儀不事夕負教尚帳事
- 一 津通の不在く而くくせ馬每人是法授け
事不事

右に條酒井雅樂以中座及は奉事申

町奉行書合未下刻中渡也

寛永十戌年正月

一 緒物ははる 百今度

一 清上流は年百列人数は或は石以下志
本没は石以上六二為半没惟は後人清用
是次書云右列有也

作出之於清白書院此年書一紙
信傳有也

同十三子年正月

一 日光寺

一 清社系付白一季居寺公人當年とて候下
石重有也 作出之候白目付之面は清社

同年十二月

一 明十七日紅葉山

一 清社系之刻法衣石石系付白目付至今日
年書中并法衣付之面は清社
清社系之刻法衣石石系付白目付至今日
清社系之刻法衣石石系付白目付至今日

紅葉山十七日正月紫雲日月同九月長袴
 九月長袴極月同右何歲十七日增上寺
 佛佛殿廿日世紫雲正月二月長袴九月同
 極月同右何歲廿日右月一二月何有依
 上意以山自來步中何書右何書何何何
 何何何何何何何何何何何何何何何何
 松平就前何何何何何何何何何何何何
 安藝何何何何何何何何何何何何何何
 松平薩摩何何何何何何何何何何何何
 飛彈何何何何何何何何何何何何何何

右通左史林月記松平對馬何何何何何何
 此拾其人何何何何何何何何何何何何

正保天子年閏正月

一 日光院 佛社系何何人一何何何何何何
 高子順何何何何何何何何何何何何何何
 信人何何何何何何何何何何何何何何

同奉二月

町中海及惠愛何何何何何何何何何何何何

二月
 一 下 あり 并 奉 入 みる び ぞ 滞 あり 振 又 あり あり
 二 みる と あり 一 上 下 あり 下 あり 二 みる あり あり
 三 あり 入 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 曲 あり あり あり

慶安元子年三月
 一 今夜

面上 極 日光 乾 沸 糸 緒 為 沸 候 別 進 切 あり あり
 面 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

拾 沸 候 沸 候 候 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 拾 拾 万 石 以上

三 重 沸 候 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 三 拾 九 万 石 二 万 石 迄

二 沸 候 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 拾 九 万 石 一 拾 万 石 迄

一 沸 候 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 九 万 石 より 二 万 石 迄

沸 候 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 一 万 石 より 二 万 石 迄

慶安元子年

一 今度日光及中 御駕籠等と御所

御先 御跡跡馬小て御供之面々御所

氏御少補列座とて侍 上意御所

牧野御所 御所御所 内田御所

柴田御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所

法上意氏御少補

口上之先

一 今度道中 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

御所御所 御所御所 御所御所

仕方の糧籍者幸遠未相斗ひ先大勢不系極
仕方一事に不成就大勢を修集

御智勢力ありと明ひて誠度之言

思召有 上意也又日光 泚成、成ひる令
お擲程の料ハ押並て戸教は程の料ハお擲
て仕ひ然て時におよむ死罪不仕して石叶候ハ
の為各別有 上意之事

一 泚供の騎馬、自糧籍者氣遠未系可
相ひてハ、系取ふる合面、三斗、為る候候
と云々大勢あつたより騎馬混礼はして不可

誠度 泚先、三斗、系、者、泚下、系

音、一、て、か、な、つ、け、り、る、候、候、泚、跡、又、三、斗、の、候、候
同前、の、候、候、一、見、合、馬、より、下、之
泚下、系、と、三、相、持、有、り、 仰、お、事

後 上意氏教少補

口上、一、先

一 泚成道筋見抱、軍傳 泚通、ち、う、く
不、系、を、極、ふ、泚、先、に、系、ひ、法、歩、り、候、見、斗、極、
下、の、 泚、駕、勢、より、十、間、斗、成、る、候、極、

下院事

但所なるの光ハ随分押寄り成とも

御駕籠の事を極めては事

一 小十人組は歩行の元は茶込御腰相持元

涉信成道中 御左右

御先 御話を相定若目安々と持り

多し時を方に在るは其の番は仕九あり

下院大勢を集り海へ参事

参り安元元年

一 今夜 御笛中入川入城船なる不審成者

通りゆく改め御書取ら下り上事

四月

一 今夜就

御系宮の 御上りる有目安若上り候

御音用にて仕立御話御話仕談多し者

還御以後御江戸御評定取ら御話御話

下事 志すも一應

了事

一火之用事、事、無所、二、住、若、火、事、致、其、來、
以、曲、事、之、下、付、以、附、于、町、之、人、是、十、人、以、
火、消、之、多、免、支、度、は、各、教、並、下、事、

但、横、町、之、其、所、之、人、救、之、意、一、人、是、並、下、事、
事、自、然、火、事、如、來、は、早、く、消、り、を、之、
如、持、候、不、及、中、借、屋、棚、か、り、之、志、す、く、
不、少、け、集、成、社、結、を、お、火、を、消、一、下、
事、

一、今、度、清、田、之、中、八、家、之、お、一、桶、水、を、入、置、

銘、之、家、之、内、之、火、番、之、者、其、人、の、登、夜、に、付、並、
成、程、火、之、用、心、に、仕、火、事、致、出、來、比、り、之、
番、之、志、公、儀、之、上、下、事、也、

一、清、田、之、町、之、火、事、比、り、之、町、之、者、火、消、人、是、
支、度、は、並、に、福、次、守、九、ツ、り、六、ツ、迄、之、月、日、等、
自、身、亦、各、一、時、智、り、之、番、柳、如、し、借、屋、之、者、之、
急、を、入、下、事、至、程、成、之、代、月、日、持、り、
出、一、町、之、番、不、付、並、下、事、

一、町、之、内、番、仍、燃、事、門、之、事、之、中、之、仍、燃、
二、ツ、以、上、六、ツ、並、下、事、

一 町中へ門目書にいと大いなる切らしき性行の
通一すいひにさしき大いなる切らしき性行の
所送りふ仕通すいひに教文けりて性行の
尚重りたる事

附不審成志通ひつゝす不審なる事

不審なる事

一 町中大附の志盗人今より所ある事の
とく不審なる事

一 不審成志の宿かす事

一 けいおせ因心なる事

石多て系有相觸ひ今度日光

清道中一登法同心元町早し不審なる事

法同心又学ひしをもの通すすいひに左折る者

見おし次身小捕法書不の石多て系ひ他

法法ひし若見のわしき曲事

仰付事

四月

慶安三年

一日光の物

大綱云極淨宮系系在公人一事子居一也
當年順之乞也後世淨法家為去年
諸人子子修相立有公之仕事

但相對して順をいふは後世の事

正月

慶安二年

是

一宿儀云為如淨定事

一自他ノ宿札不別ノ事

一晴天ノ時涉馬ノ中ノ由具不持ノ組也之
不若事

一淨泊ノ所并沙羅屋等名是事振旦治
及ノ事

一供事ノ時除ノ中ノ持徒等不ノ不流也不
及事

附 淨意産ノ別涉信ノ流馬

如是流して極小宿名不事入事

以上

四月

條々

- 一 今夜日光伏奉之時辰乃其之うさふ事
- 一 於殿中喧嘩之刻兼日如沸定之番切之
斗之也并町中に在る者町に有合志して
及沙汰根名之を集事
- 一 於旅館若大車之在り時役人介不之合事
- 一 今夜借車中人返之候之信山之沈自然
り有之ハ於江戸及沙汰根主科之者ハ

- 一 各別之町中理奉行人々裁許事
- 一 急病之刻馬より知りて以後沈身みよん
居りてハ并書之ハ外旅館不之候事
- 一 目付之面々并番の法奉行人々候事不之沙汰
根名根之等法に於法度之有之候事
- 一 附根籍名之候依之品々付事
- 一 小荷路馬之有之方上毎丁但山坂之小荷路之
山之方上付之可之事
- 一 押買押賣信山之英澄不之代探付事
附此毛場之馬と致在之候事

右條ノ科ノ煙重隨戸付ノ自光山ノ
去其番江法事ノ人見道以道於合用於
下爲曲事以介載下知状也

慶安二丑年四月

日光山 御成之刻條

一 御殿並庭而喧噪口端出奉出束之時酒井
後波等河部豊後等河部對馬等松平和泉等
牧野左波等此介書之之案一と案一と凡一
面之宿之在之相与下知事

一 御泊ノ城ノ高喧噪口端出奉出束之時
在之軍表門裏門むり次骨廣而口在
多々之在任之知事

一 御泊而外 御先 御泊之面一切
不在者之所之在之相与差等之隨之知事

一 御泊ノ城而高火事之時出清之役人
人者之戸付院然古月付北番之軍兵
差等之在任之知事

一 於 御泊ノ而古月付北番之軍兵
日光山出束之時

一 清殿多事... 役人決定...
一切石匠... 宿小... 相持...
一 清宮... 秋元... 中...
中付... 事

一 清殿... 坊舍町中... 出... 時...
去... 阿... 市... 向... 坊中...
... 入... 消... 事

一 坊中... 大目... 付...
一 清橋... 町中... 火事...
時... 定... 事... 一町切...

相斗事

一 清先... 社系... 女中... 女... 通...
時... 不... 中... 事

清小姓... 清法度先

一 及中... 清先... 相...
... 清殿... 清目...
... 事

一 清殿... 於... 合... 組... 用...
各... 事

- 一 借奉の時 御殿と系 命以後宿に裁
- 一 伺涉穢嫌 茂心仕て為無用事
- 一 乃中無宿宿おれおて 宿兼小号子外
- 一 不形儀に祈不_レ事
- 一 吉社に外想に見物不_レ仕事
- 附 法勝負一切信_レ事

右條く言は相守此有若遠宵に族お_レ事
 科燈重に隨意度言 仰付_レ也

慶安二丑年

- 一 今度日光
- 一 大納言極就 御系宮に為 成_レ乃通_レ者
- 一 廣き間中_レ海砂をある_レ格_レ家_レお_レ事
- 一 浅草砂を垂_レ事
- 一 是為成_レ時_レ事_レの事_レ形_レ儀_レ法_レ仕_レ事_レ
- 一 子出家_レ人_レの上_レお_レ事_レ不_レ若_レ事_レ男
- 一 是_レ地_レ法_レ在_レた_レみ_レ事_レ二階_レより_レ除_レ儀
- 一 堅_レ淨_レ法_レ度_レの_レ旨_レを_レ留_レ事_レ
- 一 是_レ為_レ成_レ日_レ月_レの_レ事_レ自_レ身_レに_レ若_レ掃_レ除_レ儀

勿論火之用心成程意を入りて後筆
附以端を極ては事

四月

- 一 才の如き一ありて法に依りて
- 一 仰付ひて流れ下りて事
- 一 酒をや一何し〜も見首受りのハはる
- 一 成ひたより取下りて事
- 一 浅草砂を服にかけ置下りて事 是乃後ハ
〜せ下りて有下りて事

四月

癸亥安二丑年

- 一 大納言極の目後日光 是乃清浄の付るは
幅をる事 海砂を敷置服裾〜也
浅草砂を置下りて事
- 一 是乃 還御の時ハ清り者事 形儀結は
女童子出家ハ縁〜上ハ清りも若か〜
男〜ハ地ハ在立清り事 二階より〜
以成浄法度事 うちん成志事公今

御法度以爲重事

一 是程 還御以日忘月仍持自身在否掃除
之儀以爲御火之用心成程念入下渡事
附以編之程之仁事

四月

一 大綱云極明日 還御乾は程以流之重事
之事 是町之月仍持斗法之流之重事
用心成程念を入下付以その外重持之儀を
さすのやれをとりよ下と忘し明程之時時

先日在否以下答へ未新町に言及在否以力程重
指筆事 管之程及世之用以程之者言も流之
中より右之通相和は言及之程重事
其程吟味程 是月仍事之介不流之系
以程重事度町中 是言相能以上

四月

万治二三年

是

一 御殿建事 以儀之爲重事但かろく御後ハ

下仕事

一 道あゆむとき松より掃除し付芝
より右表の儀を為し用事及ふ所
人多く付仕事

一 道へ服小湯水を儀三里祓るを重一々
下より重なる二三間程に飯屋片庇小可仕
湯水は志やく茶碗重し其外何れも
重し留るは白湯町を重し小見斗可後
云用事

一 清殿乃々 清子乃々 其清紋斗符法に

然しゆもいし西拍の如き地乃其云用事

一 清殿表む斗重表整仕殿に古重に
庄用事

一 家中一軍英町中一家古に大建重儀去用
いしう所く清復仕事

一 清供に元重儀抱一切信事

一 清供に元振舞に献之進事

以上

万治二五年

光

- 一 袂地袋摺々細英の襷紗云用之事
- 一 法及々金銀箔の紋云用之事
- 一 虎柄虎豹鞍履云用之事
- 一 襷紗とくしそ用之事
- 一 きぬの縁云用之事
- 一 洗若黨舞小の中間衣類亦込者御定々
毎々御事
- 一 のりかける蒲團亦花繁成儀云用之事

- 一 馬子ぬす物云用之事
- 一 金銀のつげ云用之事

以上

光

- 一 卦子石以下其分限小志了らぬそれの
人数書付のいとも御事
- 一 卦子石よりき方九石迄八馬上弓袂地以下
半段事但右半段は跨馬内言把取
法段人とも御事
- 一 小座より角の卦子石より四石迄是又半段

事但右半段の騎馬の内は相次役人
三百五十人

一 五万石より九万石迄八馬上に拾騎但相次役人
亦茂右に拾騎の内多くは法及具以下
右に應了上等の牧事

一 拾万石より上等馬上に拾騎但相次役人亦も
右に拾騎の内多くは法及具以下右可
應了上等の牧事

右の外餘は遠國の面々小座を以て番仕の
五万石以上の軍右決定の事

遠國の面々番仕人数は

- 一 五万石 馬上又騎 法及具以下上等の應了の減少事
- 一 三万石 馬上同 法及具以下上等の應了の減少事
- 一 二万石 馬上七騎 法道具以下上等の應了の減少事
- 一 一万石 同 同
- 一 六万石 同 同
- 一 七万石 馬上拾騎 法及具以下上等の應了の減少事
- 一 八万石 同 同

一 九万石 同前

一 拾万石以上、軍八馬上拾万石以上、
諸乃今以下馬上、
右拾万石以上、
以上

以上

万治之壬午年正月

一 東に月日光山 清宗

宮付の儀、
石倉、
及、
又、

若、
在、

一 寛文之卯年正月 今年正月同前、

寛文之卯年二月

於法、
日光、

一 秋、
一 遠、

右、

是

一拾万石以上

馬上也拾之

快炮百挺

弓三拾張

槍七拾本

旗五本

一六万石以上

馬上三拾張

快炮八拾挺

弓五拾張

槍六拾本

旗三本

寛文二年四月

是

一乃中志有備日光

御遠箇中以倭志光脚

以相伺涉積燥候以兵致之用并

御箇中涉積燥候候候英法等所中

以倭志有備一自身見且一候一兵致用等

一四品以上又志法儀代元

還御以後可有

系諸事

一日光_上名代志_上御番首莫_上候_上候_上是示

還御以後候_上一_上候_上是示

上

實文三卯年

一 今夜日光社田橋より本々無うなる
成り者涉乃筋の町に於て入念掃除可
仕海道悪変而ハ浅系砂る中より一箇中
急夜築之り事

一 津浦道中々町中、本々敷ルにッ打り本々打
往行の者町送り仕の但子通ル人を何事
通ル者ハ此と相尋先く送る事一
事

一 中書、成込人等、町を敷斗、其人増書

差並言山中書兵今迄之人其人指乘町
増書云用事

一 前後、本々之孫中子、修後一仕事

一 津成、自々町、名之月、仕事、何方、此も

不、此、火、自、心、成、裏、相、込、入、念、相、觸
事

四月

同年五月

一 明日の後日津、旗本中、津、旗本

仰付付る花中口上る傳達し定書

一 今夜御結付る由緒本中不所出仕事

以る者宿火之用公堂下付事

一 中馬人多く下りし由り正堂三人より

相付くハ二為無用事

一 御結返退者別下馬高面馬有る由り系

不込合指系下付道くむさと馬と事か

以て下合混乱はる由り下りし可

付付事

一 廿七廿八両日御結はる由り法書取

當月廿九日むより次中一人上系組中ハ

右の日限番取下り系は番取も支配人も無

面くは是又右の日限むより中一人所

の系事

一 御結見物良言取候又言難談言は極小

番取支配人前席より候下り後御結は月

切見且下り事

一 支配人言面くハ法目付中前席より先條

に通下り後事

一 御振舞席番取組取支配人前席より

承命御振旦臨此格之仕由御審以支死人
于席立之白之致其川以事
一支配人等之而一八在在安事以并法目付之元
相加御振旦其下以格之仕事
一御転送一同之退おひつて混乱系以
其おし格審以組以又去支死人之為事

以上

八月

正徳二辰年

御宮 御佛殿 御系詣時分供事之而
侍候に承法大吏之何哉右刀之為事
正月

先年日光山 御成之貴法向之勤方之
向より書おし格相觸之吟味は帳面
下は多知以上

二月

正徳六年

一向後 御装束言 御糸指之長行列

一 御家八先例之趣 每人御糸指用小廿刀之
一 相勤事

一 諸元口品以上之趣 一向後行列之長小
不及公御糸指衣若用 御糸

御目見之仕事

右之通之相觸

六月

享保二年

明日之紅葉山

御宮 御糸指之付

下馬

一 西丸御厩水之角

右之西丸大之御門番より御家御糸指之御勤

一 月櫓田御門外腰掛御糸指之御勤

右之月櫓田御門番より御家御糸指之御勤

一 坂下御門外下馬札御糸指之御勤

月櫓田御門番より御勤

一 下馬より内あぐり 御中丸にお仕し面々
 御用より相色し 下馬は馬控より礼を
 卯乃はあぐり下馬
 一 豫多き元刀持二人 象復取一人 面天より
 傘持一人 卯を坂下 出門より内あぐり
 右通中 渡はる如例 出籠目 亦下馬より
 一 刀持象復 九傘持 赤橋 延下馬 下馬
 出門 外形より 拂出 一 傘下馬 出籠坂下
 出門 尚書 赤橋 出籠目 亦下馬 渡はる
 以上

介

享保六年四月

徳美
 同 古澤代大名
 同 嫡子

右白後月十七日紅葉山

御社系より列て 赤橋有は 仰出より 延下馬
 還御以後 赤橋可仕は
 右通中 相觸は

松平加賀守 松平若狭守 松平播磨守
 松平左京守 松平右京守 松平播磨守

松平丹波守
松平伊豫守

松平出羽守
松平大督

松平中務大輔
松平肥後守

松平大膳
榊原武敏

戸田宗女心
榊原伊豆守

松平但馬守
松平之針氏

来^九十七日紅葉山

清社系之遊^以四月十七日各別儀名向後

清社系之長孫系清月見夜一還清以後清礼

下社有也 仰出山

享保十三未年七月

元

一 未年四月日光山

清社系之延有也 仰出山付為涉祝儀

明十八日想出仕之事

一 西九月為涉祝儀明日想出仕之事

一 右為涉祝儀先中若年步中宅何儀

之相也之事

但万石以上病年初少之而八月番

先中對馬守之使志之者哉山

一 在國在邑之面々每深居之面々死札可
差越以對馬當方也格状志下敬奉
右之通一也相觸以上

日光山 淨社系涉用延之面々忌服
所成以上も来年四月

淨社系之忌服禪明之面々八不及
去之惠也若涉用相勤下之候服禪之日
涉用之也淨山之忌越以儀亦八之也
三之付以上

七月

右之通延々 淨社系涉用之 仰付以上
来々迄哉之也也也

先年日光山 淨成之良法向之勤方之向
書若以相之相觸是吟味任帳而来共日迄之日
三之也也以上

七月

法禪中之面々来来法書未相勤以上之也

勤茂多し其の法より増茂疎小成り候
 今度日光 御系詣に 仰出ひ付る由儀に
 軍子煙の才ともれ旦しと人馬法其具
 玉込相嗜奇事候小に
 思ふ事人馬に限る候一或る法及儀小
 随ひに 仰出候儀にさ条外見をかき
 御物より南へ東儀并諸構とこの儀に
 多し候儀候小
 右に記ありし一と御系詣に以上

享保三末年八月

日光山

御社系詣供并勤番面々石連ひ人数は元

一拾万石以上

旗 五本
 鎧 七十本
 弓 三十張
 鉄炮 百挺
 馬上口十番
 旗 四本
 鎧 六十本

一 六万石

弓二十張
鉄炮八十挺
馬上三十涉

一 四万石以下者亦同

今度日光也

一 清社糸之付白湯信等其裁面之結構成候
且又其之裁等極之相心以是年未迄候事
之は用也

享保十二年

此度日光

一 清社糸之付湯旗布之面之通是

一 衣服紗綾縮面より上之品亦用其候若黨

小者中間衣類亦清室之通候より可

仁事

但袴純子縞袴子之類亦用之事

一 鞆等後馬纏法復座紗天結織毛革亦用是

座紗押子縞子縞亦用之事

但了らぬ本紗之亦亦用之事

一 糸子了らぬ蒲団亦亦結構成候亦用之事

一 布衣以上之地位人二百石以上之権二千人數
十文人子石より子九百九拾石迄八権二千人數
人數計拾人三百五十五人

八月

日光山 御社系江村村分左書付渡し

一 法祖段羽織木形規之相渡り下り以右を
相用ひ下り以換り以右八見分之上相渡
り下り

但法祖以下所列之各羽織等相渡り

了事

法語書行

百人組之取

法徒書行

法持之取

法先手

法換地方

法儀取

法納戸取

法腰物書行

法換物估當分司書行

法弓矢書行

法具足書行

法幕書行

法懸取

法巻取

法馬方

法細工取

法敷書屋取

奥坊之組織

右之組織之在也

来年四月日光山

御社系組織の付法向由の御法乃具新観法に

以不及りて来山と用下りし若換はる程用分八

見系之上相渡下りし

但換しはる程新観相渡は法乃具

之来法乃具之色に合不り分八少不

若しはる程之也

法書院書院

百人組之代

法持之代

法先子

法法代

法腰抱之代

法弓矢渡之代

法幕之代

法細之代

法禱之代

法渡之代

火消役

法法代

法納戸代

法法代(第一等)

法具是之代

法馬方

右之組織之書付下り相渡也

享保十三未年八月

一 未夏日光

清社系註 仲出の付法迄未成言未仕
冒爰の清の成以日像言未お成以何小
しに成成なり言未成一或買しぬ未
成しぬの有り及見及少成身百捕吟味
し上急成及中付る言未しに付有町中可
解知者也

八月

同年十月

光

一 未年四月日光

清社系付清信の面乃中法入用しぬ
諸乃具系後しししホ云と平生に成成り
言未小賣出中る爰に右取し元未成謝兼
同成せより書出さ世に成系言未成成
相知し言未成下付し事

一 徳色圓く在し元未成言未小賣出しり

言向し高賣人たより下出い具又は表并

國に在る小ぢりて主高賣物小て無き者
ノ賣買の杯致し族々有相討つ不慮
是又子孫の爲に高賣人より下が吟味の上
急度下り付し事

一 南留屋切便知もたのこる並小致る賣し事
買並ノ賣心申しその事ハ南留屋法屋
仲々有る月より下り出ひ吟味の上急度下
り付し事

右ノ取致遠宵終事小たすこと徳延る事
致し以て後日に相知し事も江表高賣人ハハ

不及中圓を在る者ハ遠明歩急度曲事

りり付し以上

十月

右ノ通言相觸し

享保二十二年十月

是

一 來年四月日光湯借の面ノ湯當他四方より
雇ひ當る然る者并徳日雇賃根一切之
致る爰有四方相觸し日光迄系並候書

兼而九重いなる雁の面くまのつら相雁
若く半俣浪に重ふいしはそのもよひて
町奉行のふりて候て相違ふ事の新言吟味
より著し以筆

一 武士方一季居し其公人來年二月迄に格が
主人勝の浪身共今迄に信人より候に仕書不
出旨主人より喉出し候に格別其公人より喉
れ候仕書及有町奉行相觸いなる事有候
相觸い候若く遠寄いものより候に格別其公人
より相違ふ事仕書仕書同旨候も同前候に候

以筆

以上

十月

來月日光湯供の面く万石以下に分限の
意に古技持方より其概古河守教官
日光より渡場より御泊二日前より
前日また小前古照法代宿より黒米等
平技持に候り相渡候に目又日光先年
塩増新相渡いふに候も相渡り候若く

涉校持方江谷言法九度面々
委細福生不雅事に取合吾
書付言者おの有向く
十月

享保十二年十月

是

一 来也月日光法借く面々道中法校持方
法九度言先達言書付言者
涉用子り法勘定組以裏判れし三月勝子

次身法儀言法藏言目教九日ふ来可法法九
以事

一 岩槻右河守教官日光言法九度言先達言
書付言者おの有く来三月中法勘定組以
裏判れし 涉泊言 涉言二日前より
おの述勝子次身言所法知法代官より
来言法九以事

右通言相言法九以事
下言言以上

十月

享保十三申年正月

當四月日光

清社系の長湯信向の万石以上以下は、徳美、
米、帯、衣冠、布衣、土、仕、家、米、店、番、元、の、米、施、下
之持素

右の通向の事相案以上

正月

一 日光

清社系 清田中川能清船より取込

江戸中船問屋より判鑑九並川合相色川

一 正圓の楳船押送り船大カ并江戸舟の茶船

辨舟の儀ハ昼夜の出入の法船より前方

不沙木札の判鑑渡一色地灯の取込一色

見合舟一以上

一 自負繩付并武具の取込色以上

一 出家女并若衆の取込者于支取より子取れ

通一以上

右の通向の事相案以上は、船子相積支取
以上相解以上

一 日光

一 淨社系 淨箇当中 川筋法親より承取候
 大名之船ハ兼与法箇古居ノ 判證取置候
 次有手形ノ引合相取候事
 一 手負繩付并武方ノ取付不相在候事
 一 出家子女并茶飯取置候者ノ取付方ノ手形取付
 毎一ノ事

享保十三年三月
 光

一 来月日光

一 淨社系ノ取付淨借并勤著ノ面
 淨宮 淨靈屋淨礼ノ取付法借ノ面ハ
 淨系借置日 還淨以後勝手次第淨礼
 取付候勤著ノ面ハ日光
 淨社取置以後地取置候取付迄ノ内勝手
 次第淨礼ノ事
 一 淨宮淨礼ノ面ノ取付
 淨方乃金馬代 拾万石以上
 淨方乃馬代取置候 二万石以上

同銀並投

五万石以上

但五万石以下、清法力馬代銀並投を於て

清法事未了迄、清書賣取を以て

差上下

清書賣取に就ては

銀五枚

拾万石以上

同三枚

六万石以上

同二枚

三万石以上

但万石以下、不及就ては

右通に相觸りて

之月

是

一 日光清山中并 清泊城、大子門馬場

信山事

一 日光 清旅館迄、切取事、下系、由光、

山崎、入切、内、当地、事、毎、三、相、觸、り

一 清山中、當時、関明、六、時、三、宗、事

右、此、日光、相、触、り、而、し、清、書、賣、取、事

毎、年、三、回、上

此度日光山法信之函に於て清山下宿に於て
也耶未亦用なりとて見出さるる若き抄用可
きとら右左の主人に説文法書可なり
は有るなりと云ふ事也

但主人百選の旨に於て清山は
日光法信之函に於て云ふ如く天竺
夏竺月以下有向と云ふ事也

日光山院

清社系教旨 仰付の旨享保十巳月接る

下社書に於ては日光 還清以後尚月中
書付の旨に於ては

三月

右三書の内は

光

一書に月日光

清社系付の旨に於ては日光に於ては
飛脚に相付清社様儀の旨に於ては
一清田中八左衛門大右衛門一度

伊賀守宅に使者を遣相伺沙檄據し
 大納言梅沙檄據し 清田守中三度往
 對馬守宅に使者を遣相伺事
 一 在府に大名出書兩に相詰問之介ハ
 清成當日より 還清古田日迄は政在宿營
 火之平今迄之不和火より 早連入敷之也
 清田は格下之也事
 一 清成古田日迄舊代元徳元為事同編敷法
 同嫡子大徳舊代徳物以諸段人中
 清田見之也事ハ 還清之也ハ右之面ハ

清田見之也事
 一 還清之也 清成時 清田見之也事
 之介不及知仕伊賀守宅に使者を遣檄據
 之相伺ハ為法從儀 還清之翌日如知仕
 之也事
 一 在國在色之面ハ江戸 清後如駕之儀ハ
 以後伊賀守對馬守に飛札格状之也事
 還清之儀ハ水以後亮中對馬守に使者を
 遣之也事
 右之通之相連以若事多之記之從清田對

相在善極上渡山名三後山望

二月

日光 淨社系 淨箇中

法奏者普人

三事以一人元

大目付一人

右外番諸子外將法役人返高番諸番泊番
外淨用者法役人不及也 城右之面々
常々之趣也 城右中若年奉中若年

次身退如之事

一 法胤 淨本丸法日不及也 淨箇中丸丸

一 度及為洞湯様様之事

一 淨箇中丸日之各月奉合丸起行

及之事

一 不之勤者之太倉子外代者之病系之
嫡子之面々ハ嫡子相勤之代者ハ公家
斗之相勤之法者ハ法相代未助ハ改之
因及之月より見事ハ之勤事
一 所之法門番之面々一月一度見事泊之

三夜以常八十代より以後也 清尚書中

又自代り言相勤事

大手清門

内橋田清門

坂下清門

紅糸糸清門等々来清門

右清門等々時一切下は但平川は清門を

常々通は仕承るは時以後は念念格可也

致事

但大手清門内橋田清門坂下清門火事等

見合常々通は言は致事

田安清門

清水口

馬場生清門

右三ノ下清門 清尚書中切言致事

從來未言は格は言致事若火事等々一前志

早速清門火事消へ句論子外從來言格

言致事

中野清門

右清門火事致事

月光院極淨用斗乃次第子支卷每法
 之極之云云被公充火事有之昔八早連
 淨門案前條之通從來之極之云云
 外橋田淨門 和田念淨門
 竹橋淨門 維子橋淨門
 一橋淨門 神田橋淨門
 常盤橋淨門 吳殿橋淨門
 飯沼橋淨門 數寄屋橋淨門
 日比谷口
 右之淨門以爲善六時ノ切乃之者八条以先

承應淨門通一之字以若火事之之
 早建淨門案火清多漏于外從來之極
 下云云
 一 淨橋淨門中ノ窓多ク下云云
 一 浄城內出善法相山中云云
 一 伊賀守本多伊豫守泊相勤村夜中
 急寒夜子ノ夜對馬守松平能也云願書
 信九云云

一 清田中万石以下高之清穢燥何成
 法者多之八於 清穢何物言本多何穢
 清穢燥相同以且狀伸之間也
 友人宅上正氣相同不及法者未之入而
 清穢燥相同不及此事
 一 清田中万石以上相在如准
 相法面之千介各授用事八格到穢他
 不仕致在宿火之元未入念中付以穢
 右之相考之相在以上

享保十三年二月

万石以上通達書付

今夜日光山

清社素相漸遠清以後万石以上
 日光山素相漸遠清以後万石以上
 右初屋住之不及其穢

清穢代元
清穢

是

古今近日光山
 清穢代元之相穢

一 御宮沖札等山草字より系請事云

御宮沖札等山草字より系請事云
一向後日光山
御靈屋為 御代に就て西へ
御宮沖札に依願次第に 御代事

是

日光山系請之云

御宮 御靈屋に就て系請之云
一は相伺ひ例等し申事左に通すに就て
御宮に就て相

拾万石以上

御左刀全馬代

又万石以上

御左刀銀馬代又枚

又万石以上

御右刀銀馬代又枚

御靈屋に就て相

拾万石以上

白根又枚

又万石以上

白根三枚

き万石以上

白浪を投

右通三之助之事

享保三申年三月

日光淨社奉 淨箇中町ノ下町迄

一町ノ火元ノ候別ノ入急出火云云相与可

ト云事

一平生風烈ノ時分計町ノ火ノ見所小者人ノ今迄

町火消人ノ支度及以テモ 此迄止ル也

御箇中ノ本年日ノ火ノ見所者相親ノ火元

火消人ノ支度及以テモ 此迄止ル也

相与可ト云出火ノ事ト云事ト云事ト云事ト云事

相与可ト云出火ノ事ト云事ト云事ト云事ト云事

相与可ト云出火ノ事ト云事ト云事ト云事ト云事

ト云事ト云事

一町方自身書中者ト云先年火元止ル也

淨箇中ノ火元ノ見所者相親ノ火元

相与可ト云出火ノ事ト云事ト云事ト云事ト云事

相与可ト云出火ノ事ト云事ト云事ト云事ト云事

神事

右之儀急度之相守之儀教示力同心相早
以習之有一相心以若中付未熟高遠背儀
於之儀之儀之儀之儀之儀之儀之儀之儀
以上

三月

日光 淨社系法道筋町之儀之儀之儀

一 淨道筋町之儀之水子桶拾間小一之儀之儀
盛砂儀之儀之儀

一 淨道筋町之家他并木戸被破換之儀
手前斗儀之儀之儀

一 淨乃筋町家男女之儀上野増寺

淨成之儀之儀小相心以男之儀之儀之儀
在在女之儀之儀見世小之儀之儀之儀
手前斗儀之儀之儀

右之儀淨道筋町之儀急度之儀之儀

三月

一 今夜日光

清社系之付氏出方清事公人振なりり
 差重なるの當春清事公人共
 欠居所之格法清人共入之世以後新觀
 考子小成度し者之入格なり
 昔者お元宿形能多欠居者お元宿に
 相渡し双方より月書之書物に海書若
 不吹味して欠居者之清之書物か
 元宿見付清お吟味し上意度し付
 先在りも能無友清人入之世に海書者
 相觸はるも其世に自今不格清人共

早之りお若服より相触り家主又人組
 名之進之直り付の条奉公人之清人共
 中地借店借亦進意度し相習也

三月

享保十三年甲申四月

是

清小姓 古小納戸 奥醫師
 奥坊主 古棧箱足 古弓之三
 清具足持 清之傘 清床札

以上

本月十三日日光 御後駕同廿一日

還御之時 御見送り 御進之儀 法儀代元

法元法元並号布衣以上法役人

御後駕相海寺 御殿之儀 御進之儀

還御之儀 御進之儀 御進之儀

御殿之儀 御進之儀

右之儀 御進之儀

享保三申年四月

御前相勤

諸署法相取

布衣以上法役人

寺合 法儀代元

勤署中川法儀

右明後六日 御進之儀 御進之儀

給麻布之儀 御進之儀

四月

條々

- 一 今度苗字中平日之事戸田山城守令る
- 二 相討に及ぶに及ばぬ時ハ
- 大納言以下知事系に好む事
- 一 於城外何處に子難むに城中者軍
- 少老か心取付る事
- 一 喧嘩口端に更相詰り若無控案後日
- 三 為沙汰事
- 附於城中第一喧嘩口端に時
- 子取に及ぶに及ばぬ時

- 一 城中并取に勤着に面し兼白定之法及此
- 候々にお事
- 一 火に用ひあるに自れ城中火事に於
- 出来ハ 殿中者軍山城守に御座り
- 并番取に任る事
- 右條々可相討に有者や

享保十三年四月

日光 赤成相海 還赤成後
赤成後然上之先

三種一石

西九石 三種二石

三種二石

西九石 二種一石

三拾万石以上

拾万石以上

二種一石

西九石 一種一石

一種一石

西九石 一種

八万石以上

五万石以上

右之通來其旨以便宜者亦相在也
在國左色之面之石以高地之者可及也
一編之隱居之面之石以不及以上

四月

泚後駕之日而泚門者乃石以上矣以下也
為泚目見不及也 城以法者不_レ相法可
子立也 泚成以後也

大納言極_レ 泚目見之_レ不及也
但 泚成乃法者不_レ相法以面_レ公者
泚成之道法者不_レ過也
泚目見之_レ不及也

右_レ通_レ之_レ相法也

日光 泚箇中八日履 泚城內一入
中_レ為_レ及_レ以_レ之_レ後向_レ之_レ相法也
日月

一 日光 泚後駕之日
外 檜田泚門之外
馬場先泚門之外
右 下馬之事
内 檜田泚門之外
右 下系之事

但 沖成相海いりて常事

一 還沖之日

右同の

但 是を沖相海いりて常事

右 通向いりて常事

四月

櫻田新橋 芝難波橋 永代橋 新橋

柳橋 和泉橋 昌平橋

右 七下 沖通中ノ並に流木等ハ火事ノ時

火消し通一ハ若シ火起リテ由ルニ早ニ昭及可

右 通ハ事

四月

組合

了家

若田隠波

大津左京

月夜下左馬

素山 左馬

本目 橋

三浦 寺 巳所

本間 忠左衛

組合

山田宗園
若林勘十郎
松永市左衛門
荒木氏在馬
西九古小納
本善多我園防直
小善法組松八市左衛門
表醫局

来十三日表成刻より羽子十三日

清成相海は迄廿一日辰刻より還清相海迄
清成法乃筋人苗は乃西へ屋敷向方は乃東
差志 清成法乃人通一は乃東公人苗
場下子外儀町奉行は乃東水合山

右通一は相乗山

神田橋清門番

九鬼丹後守
伊達若狭守

来十三日表成刻より羽子十三日

清成相海は迄廿一日辰刻より還清相海迄
清成法乃筋人苗は乃西へ屋敷向方は乃東
差志 清成法乃人通一は乃東公人苗
場下子外儀町奉行は乃東水合山

本庄大和也

来十三日夜成之刻より翌十三日

清成相海以迄廿一日辰之刻より還清相海迄
神田橋外乃より明地月迄家来至若菜園
清道筋の方上人毎丁中一里敷固場所
于卯之辰町寺行上言水合也

松平加賀也
松平甲斐也
後寺也也也

稻在丹後也
松平伊豆也
去井甲斐也
松平至膳也

来十三日夜成之刻より翌十三日

清成相海以迄廿一日辰之刻より
還清相海以迄 清成出居筋人苗以迄
面之在及向歩上家来至若菜
清成乃人毎丁中一里敷固場所
于卯之辰町寺行上言水合也

右通言相在也

来^レ十二日秋成刻より翌十三日

津成相^レ津^レ其日辰刻より還^レ津相^レ海

山^レ南^レ津成古及^レ箱人^レ苗^レ有^レ社^レ願^レ門^レ和

所^レ家^レ家^レ来^レ也^レ一^レ言^レ中^レ付^レ也^レ所^レ在^レ以^レ下^レ法

相^レ後^レ也

右書付^レ有^レ社^レ奉^レ行^レ右^レ左^レ乃^レ登^レ津^レ

津社系津後駕^レ日

堀重津門^レ有^レ白^レ洲

下系橋^レ前

津玄園^レ前

津玄園^レ前^レ津門^レ
外^レ有^レ津門^レ内^レ道

百人組^レ番^レ不^レ和

洞^レ法

法^レ德^レ代^レ大^レ名

同^レ痛^レ子^レ在

法^レ庇

同^レ痛^レ子^レ在

菊^レ同^レ縁^レ頼^レ法

同^レ痛^レ子^レ在

大^レ古^レ番^レ氏

直^レ番^レ氏

右之亦、殿中於所、清月見
一還清、之、之、同、
右、通、之、相、連、也

清、夜、如、之、以、後、於、
清、本、丸、出、仕、之、面、
大、細、去、極、清、通、子、
清、月、見、之、為、法、席、

清、里、書、院、滿

濁、法

西、湖、間、錄、類

高、家、元

法、元

清、里、書、院、清、勝、子、方

月、次、計、席、

清、月、見、之、面、

帝、繼、間

但、古、復、八、初、之、因、也、

法、僧、代、大、名

同、痛、子

法、元、痛、子

茶、葉、間、錄、類、法

同 稿 子

其外諸書既
法相既法改人未

一 末十三日日光 沛成園廿日 遠沛之各所

西之廣斗日給麻卡之周事

一 殿中法書泊書之者極愛迫而火事之

山々 沛箇書中之退志不仕書之

右之紙向之云云其書

四月

日光 沛社系 沛後發駕之日

百人組法書不為

西九 廿

西九 廿

沛里書院沛陽之方

月次以席之

沛月見之

帝濫間古紙類

古書法書并

布衣以上之役人
布衣以下之役人

此等を後向くは事なき

一 古徳代より 清月息の在るに因りて情天の如き
先達を極くは場不の事

但しある天の如く 清後智の事

四月

光

一 今日 還清相繼は身中自身為中為共
今曉より有用に仁生を遂ぐ一仁義復本戸
の儀も勝り次第は身中拂下りし時中早く

下は相解以上

四月廿日

圓持英

万石以上

嫡子

高家

古苗与居

法著氏

法相氏

布衣以古役人

右今夜日光

清社系首尾好相游以爲清社統儀其廿五日
不中時也 城以松三石相連其石屋其日給中修
了之善用也

四月

享保三申年三月

一 日光山之系諸之面之付役以上六五至江以八特家
徳之更ハ大紋右之通之役者用之と持礼也

一 清山并乃中其不込合松三石之石屋其日給中修

遊之系諸以松三石也

右之通万石以上之面之石屋相解也

三月

今夜日光

清社系相游以爲清社統儀其廿五日清社
之見相也 仰付以石屋其石屋其日給中修
布衣以上清役人具又清目見以上之役人考合
出書元小十組近儒者醫仰雨其廿五日

又時々々々 城山

但十日十二日之儀、中合五日之内申分可
是子息の事、若くは六月次、彼が仕立分
に申分可

表向より出札書
交配 歩合

右園の南首の内時々々々 城山

一右邊の儀、御清徳具物は、御中對馬
石川正信の事、若くは中松平徳也の事、可
相見

右邊の儀、御相見の事、西九法、御中、可
相見

又月

日光山系、御清徳具物、御中對馬
對馬の儀、御清徳具物、御中對馬
右邊の儀、御相見の事、御中對馬

又月

享保十八年

八月十日、是氷川明神具、又山王

御系清湯清之儀前々々通山百石存于法
向々々々々々々

八月

元文二己年

来々上目山王且又氷川之神也

御系清湯清之時々清湯掃山百石存于法

向法清之儀前々々通山百石存于法

右之儀向々々々々

二月

来八月中山王且氷川之神也

大御云極清之儀前々清湯掃山百石存于法

向法清之儀前々通山百石存于法

七月

来廿七日紅葉山山王也

竹之代極清宮系之儀存于法 作出之付

為清院成明日法流法奏者番三番次

芙蓉宮之同法役人 清中九西九之儀

此外々々法流儀中々々不及也

右之通一江相在也

九月

九月廿七日

沛宮之事其以松平肥後守松平漢波守候
還沛之旨西九沛言國前之形也

沛目見之仕也

一 沛門當番之形列之不足為法後代元
法元法奏者青葉之向經類法之面
沛目見之仕也

一 沛本九法合之仕役人

公方極西九之 沛成以後西九之相越

竹子代極還沛之旨相越之形也

沛目見之仕也西九法合之仕役人其在也

其在 出沛 還沛之旨 沛目見之仕也

右之通一江相在也大目付一人

沛本九之相越之形也

一 竹子代極為 沛之系系紅葉山

沛宮吏より山上之形 沛之系系

還沛之長井伊掃部宅跡為 安山宮

一 西九國表法廣友其法法 前之安山
沛宮 沛系循之通山事

一 紅葉山之紀伊中納言殿德川右衛門督殿法意
庶流越前其法法代元信元口不以此而
豫系之事

一 紅葉山之法法代元信元法意其書系之同
極敷法之外出付山法法以諸役人供奉
仍列安山之供奉文より掃部宅

還沛之長井伊掃部宅跡

一 山王寺 紀伊中將殿德川刑部左衛門督
主印之豫系之事

一 沛成乃 庶友定室蓋之及門宮門之内
一類 其年家來男女其在沛見仕不若

但 沛成之長 賤釋之者其在沛見仕
不若沛 還沛之長不若

一 翌日如仕之事以名 還沛以後法法極同
使志其在不及之事

右之通其法之意向之其法法在四月十七日

通装束云々

以上

来十七日

清宮系付布衣以上等 清目見以上等
清目見付 付付以候、布衣以上及人、西丸
太子腰子前、並居 清目見布衣以下及人
且古者方八方と將監、臣及前、外様田中、外
左右、并法防、因備、与、座備、前、古、城、端、通、並、居
取、之、面、八、子、場、而、一、江、組、以、左、居、在、是

清目見之事一云 還清相濟以迄右場云々

並居之事

- 一 布衣以上、西丸、相探、在、是、知、業、止
- 一 清社系、以、探、以、西丸、大、小、腰、子、右、殿、の、事
- 一 布衣以下、西丸、事、清目見、場、右、相探、以、是

竹子代探 清宮系相濟以迄清社系

清宮系之相探 清社系西丸は時廻り仕

多、候、一、く、の、服、紗、小、袖、麻、下、等、と、是、用、以、是

先中右系之更仕也、与、并、表、年、步、中、に、是

相見事

但隱居初少之病案之面之、右中右多事
能也、宅上、以使先法、祝儀、下上事

一 在園在色、之、万石以上之面、八使札、之、
之、為花札事

但在園在色、之、隱居初、之、拾万石、之、
為使札、之、八使札、之、

一 万石以上之面、右法祝儀、上、把園、初、六時、
之時、之、因、清本丸、面、九、之、敏、上、之、之、事

但

清於屋、換、之、上、把、之、之、面、之、志、酒、丸、中、之、之、

右、刻、限、之、後、上、上、事

右、通、之、之、相、觸、之、

九月

元文四未年

来月朔日於西丸

竹、代、様、御、禮、之、在、清、親、式、之、之、在、紅、葉、山

御、宮、之、

竹、代、様、清、多、儀、之、事

- 一 神酒神取裁之々々事
- 一 德系依事仍到例年正月十日
神系指之通事
- 一 西九 殿中屋其日長徳忌用之事
- 右之通事仍于意公向之通事

十月

元文六年

来廿一日紅葉山

神宮

竹大代極神系指之良大紋仍到之面
 神系指之 神先之坐之坐每夜並居之新之
 左右之到居之極之云云故以云大目付茂丁之
 事裁事

但白丁之者之每夜並居之可之坐
 以事

- 一 大古番之素袍着茂先在而西九法裏神門下
 法着座照櫻之下より坂下之方在下之座可
 中事
- 一 神先之長刀之取由人仍到之仕事

右之通_一心_以法_事 旧曆十七日
清系_諸之_時 通_以者_一 海_之意_以
正月

